

北海道遺産 函館山からの提言

教材：「世界遺産 白神山地からの提言」（教出5年下）【12時間】

授業者 森 紗織

実践のポイント

国立教育政策研究所による平成29年度全国学力・学習状況調査の調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実に向けた説明の資料で課題として「目的や意図に応じて、場に応じた適切な言葉遣いで話したり、必要な事柄を整理して書いたりすることに課題がある。また、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめることにも課題がある。」ことを指摘されています。毎年6年生の4月に行われている「全国学力・学習状況調査」では、5年生終了時まで身に付けた力が明らかになります。

そこで、5年生段階で、「説明文」の学習において読むことと書くことを密接に関連させて力の定着を図る単元を構想することが必要だと考えました。

説明的な文章を読み、分かったことや考えたことを、話し合ったり文章にまとめたりする言語活動は、文章を比較しながら読むことにより、共通点や相違点が明確になり、それぞれの文章をよく理解することにつながります。高学年においては、日常生活において考えをまとめる際に、単一の情報のみに基づくのではなく、複数の情報を比較や分類をしたり、関係付けたりして検討することが必要です。

本単元では、主に総合的な学習の時間と絡めて単元を構想することで、「読むこと」と「書くこと」を密接に関連させて相乗効果を図る学習にしたいと考えました。

授業のねらいと展開



本単元は提言文を書く目的に向かって、さまざまな種類の資料から情報を読み取り、整理・交流することで考えや根拠を広げたり深めたりしていくことができるようにしていきます。

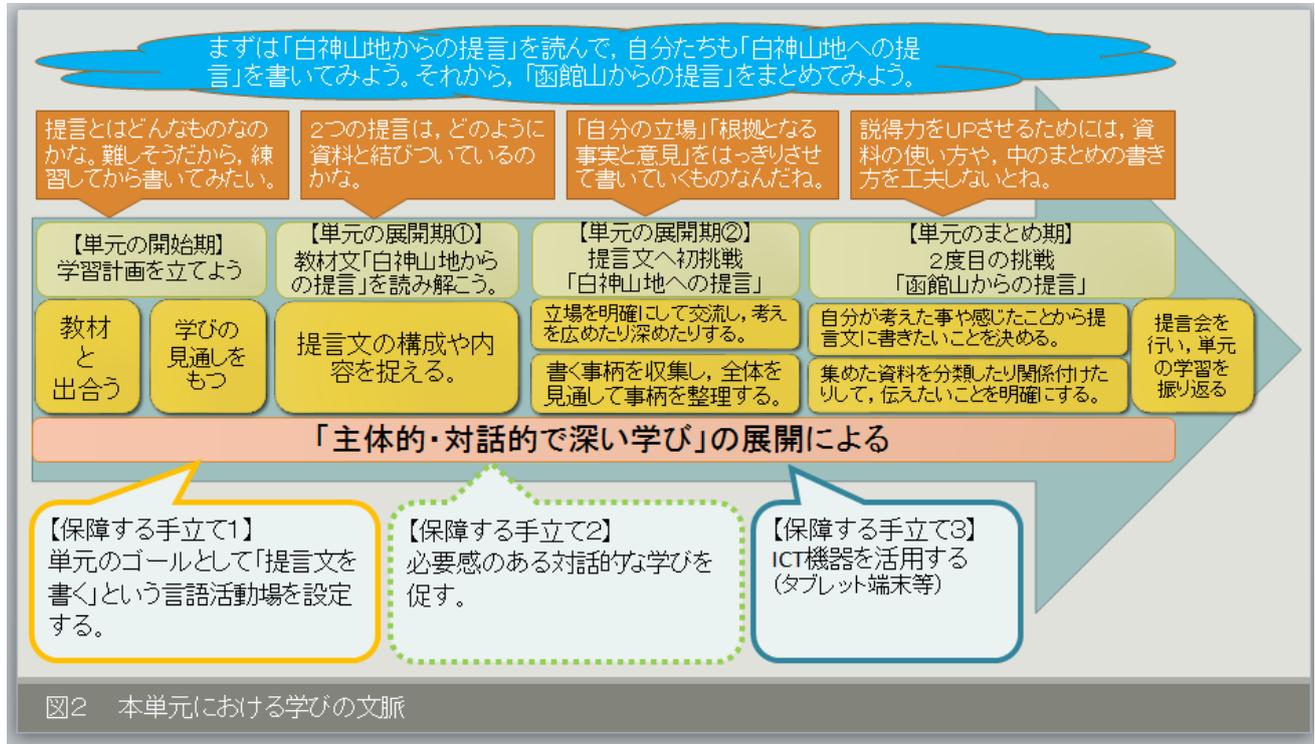
第一段階として、「世界遺産白神山地からの提言」を参考にしながら「世界遺産白神山地への提言」を行います。教材文として2つの提言文に関連する資料と共に読み、その上で、自分でも提言文を書きます。

さらに、その経験を生かして第二段階として「北海道遺産函館山からの提言」を行うことで、より確かな力へとします。

図1 北海道遺産である函館山で調査活動を行う様子

実践のここに注目！

視点1：資質・能力の育成を支える学びの文脈



五年生国語の教科書（下）の「世界遺産 白神山地からの提言」は、文章や資料を比べて読み、提言文を書くという単元です。現在の国語科に求められている力に対応して、よく考えられている教材文だと人気が高い一方、研究会等で行われる現場の先生方の意見交流場面では「資料の読み取りがむずかしい。」「文章が硬くて子供たちにとってハードルが高い。」「白神山地に興味をもてない子供に提言文なんて考えられない。」などの声も多く聞かれます。

この教材文は2つの白神山地について書かれた文章と6つの白神山地に関する情報資料で構成されています。それぞれ違う筆者による「ブナの森が支える豊かな自然」「白神山地の自然保護-『緩衝地域』の役割-」で始まり、資料1：地図「白神山地の位置と世界遺産登録地域」、資料2：「入山届書の例」、資料3：「新聞記事より」、資料4：グラフ「暗門の滝をおとすれた観光客数の変化」、資料5：「白神山地を旅行した及川颯人さん（5年生）の感想」、資料6：「白神のマタギ工藤光治さんへのインタビュー」で終わります。それぞれが独立した資料ではありますが、一つ一つに自然保護と関連した情報が示されています。このようなスタイルで説明文が教科書に掲載されることは多くはありません。

もちろん、子供が自然保護に関して異なる立場「人間を自然に近づけないようにして守る。」「人間が自然と関わりながら守る。」のどちらかの立場決め、資料から自分に必要な情報を取り出して提言文を書くだけでもとても有効です。

しかし、自然保護に対する考え方は、身の回りの自然に目を向けると身近な問題であり、「白神山地」の自然保護を考えることを通して、自分の暮らしている地域の自然保護についても考えることができます。

そこで、図2のように、2回目は地域の自然保護について提言文を書く活動を設定し、提言文の書き方をより身に付けることができるよう、設定しました。

視点2：主体的・対話的で深い学びを保障する手立て

【手立て1】単元のゴールとなる「提言」という言語活動の設定

多くの子供にとって提言文を書くということは、初めての経験になります。教科書では例文が紹介されており、書くときに注意することについても記載されています。しかし、書くことが苦手だと感じている子供にとっては、若干ハードルが高いと感じてしまうことが予想されます。そこで、「白神山地への提言」を書く際にワークシートとして下の図4を用意しました。

		中					
終わり		意見	事実	意見	事実	始め	
ですから、わたしは、白神山地には 「一」人間を自然に近づけないようにして守って 「一」人間が自然と関わりながら守って いくべきだと思います。	もちろん、 しかし、	二つ目の理由は、	そう考える一つ目の理由は、	世界遺産の白神山地を守るためには、 「一」人間を自然に近づけないようにして守る 「一」人間が自然と関わりながら守る と、というのが私の考えです。		「白神山地の自然保護の在り方について提言」メモ	
説得力 UP 技		選んだ資料	<input type="text"/>	選んだ資料	<input type="text"/>		

図3：ワークシート「提言メモ」

ワークシート「提言メモ」の基になっているものは、教科書で紹介されている例文です。この例文を概ね満足できる子供の文として考え、型として子供に提示することで、より抵抗感なく書き進められると考えました。

さらに、実際の提言文とどうつながるか理解するために、教科書の例文を「提言メモ」に実際に書き表すということを1人1人が行いました。数分間の一手間ですが、実際にやってみて「提言メモはそのまま提言文になる」「説得力UP技で少し時間がかかるかも」という見通しをもったり、「これなら書けそう。」という手応えを感じたりしていました。

このような支援を行うことで、単元が始まった時に



図4「提言メモ」を使用しながら交流する様子の写真

は「提言文は書けたらカッコいいけど、書ける気がしない。」「作文は何を書いたら良いかわからないから苦手。」「と不安感をもっていた多くの子供がスムーズに「白神山地への提言メモ」を書き、「よりよい提言メモをするためにはどうしたらいいか」という所に重点をおいて学習を進めていました。

また、この時期に学期の振り返り作文を書く場面がありました。「これって立場のところをどんな学期だったかって書けば、提言メモの形で書けるよ。」「もしかしたら選挙の演説でも使えるかも。」「なんだかお得な学習だね。」「という子供同士のやりとりがありました。

「提言文」という言葉は大人でも難しい印象を受けます。とても壮大なものというイメージをもつ人は少なくありません。子供ではあればさらに躊躇してしまうことでしょう。しかし、「型」を知ることでそのハードルは下がります。「型どおりに書くなんて。」という考えもありますが、一通り書いてみてできる場合はもちろんアレンジは可能です。

何よりもこの単元では「白神山地への提言や函館山からの提言を行うために、目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすることができる。【Bア】」を目的としています。そのためには、子供たちに型を提供することでより内容へと目を向けて考えることができるのです。

【手立て2】必要感のある対話的な学びを促す。

多様な情報から自らの考えや立場を明確にして交流する話し合い場面を繰り返し設定し、考えの根拠が広がり深まったりする経験を通して、立場や考えを明確にする必要感や実感をもつことができるようにしていきます。

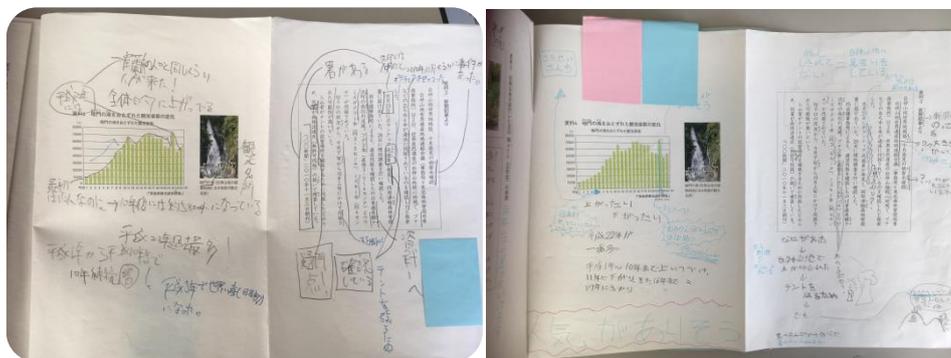
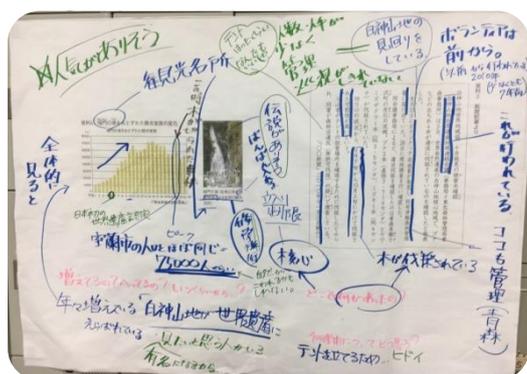


図5 子供が使用した教材分が印刷されたプリント

自分の論を支える根拠となる資料として使用するために、資料から読み取れることを書き込むことができるよう、教材分が印刷されたプリント図5を用意しました。資料から示すことができる事実をより多く見つけていくことは、2つの白神山地について書かれた文章を理解したり、自分で提言文を書くときに根拠としたりする際に役立つさらなる資料となることにつながります。また、事実から導き出される解釈は提言文を書く際に論を強める効果もあります。よって、より多く書き込むことが必要です。



この学習が始まった時には、限られた時間であること、自分が読み取った事実に自信がもてなかったり、表現の仕方に悩んだりして、最初からたくさん書き込める子供はほぼいません。しかし、小グループで交流することで、友達や自分の見つけた事

実を交流することで、驚くほど書き込みが増えたり、より詳しい記述になり質的にも高まったりしていきます。図6は全体での交流時に子供から出た意見を拡大印刷したプリントにまとめたものです。小グループからさらに全体で交流することで、自分が書き込んだ部分と同じ場所でも違うことに気が付いていたり、同意見が重なり疑いが確信に変わったり、思いもよらぬ方向からの意見を得たりしていきます。子供は、より多くの人と対話することが、自分の論を支える根拠となる資料が充実することを自覚し、より積極的に相手を求めていきます。

	意見と事実(根拠となる資料)の	HOT・WARM・COOL・COLD
ここは全員、	つながり度	HOT・WARM・COOL・COLD
	資料の抜き出し場所の	HOT・WARM・COOL・COLD
	びったり度	HOT・WARM・COOL・COLD
	意見の	HOT・WARM・COOL・COLD
	そうだね度	HOT・WARM・COOL・COLD
	反対意見の予想の	HOT・WARM・COOL・COLD
説得力(反)にチャレンジしている	されやす度	HOT・WARM・COOL・COLD
発言にだけ！	なるほど度	HOT・WARM・COOL・COLD

HOTな発言するためにアドバイス！

図6 中 交流カード

に指摘してもらうことで改善のポイントがわかったり、自信につながったりしていきました。

何よりも、何人もの友達の提言メモを読み、交流カードに記入していくことで、子供の「中の書き方」に対する理解が深まり、より説得力のある提言メモを目指して推敲する姿が見られました。

【手立て3】資料収集の補助としてICTを活用する

函館山に関する資料収集の補助としてiPadを活用しました。調べる際にインターネットを使用するのはもちろん、自分が調べた結果を一時的に保存したり、実際に函館山に調査に行った際には紙媒体での保管が難しい動画や音声データ、写真などを保管したり、必要に応じて確認したりしました。

印刷してファイルに保管するとなると膨大な枚数となり、

その印刷をするデータを精選する時間や印刷する時間そのものも必要になります。データとして保管することで大幅に時間を削減し、実際に提言文を書く段階で改めて資料を見直して考えを整理するということができました。



図7 iPadを使用して記録を撮影する様子

授業者からのコメント

他教科や領域とのカリキュラムの工夫

「世界遺産 白神山地からの提言」を、自分が提言文を書くため読むという目的を設定しました。子供にとって未知の文である提言文を書くためには、提言文とはどのような文なのか知る必要がでてきます。そのことで教材文への関心が高まる子供もいますが、それだけでは十分ではありません。

そこで、身近なものと結びつけることで、子供たちが遠い世界のことでなく、親近感をもって文章や資料を読み進めたり、意見をもつことができたりするのではないかと考えて、総合的な学習の時間と絡めて構想しました。

総合的な学習の時間に4年生では「函館PR隊」として函館の魅力を調べて発信する学習を行っています。子供たちが函館空港に降り立った人々に向けて函館の魅力を満喫するコースを提示するという内容です。その中で子供たちは「まつり・イベント」「歴史・文化財」「景観」「食・物産」などを取り上げていますが、「自然」についてはまったく触れていません。

そこで5年生では、「函館PR隊 自然編 函館山」として学習を進めています。調べを進めていくうちに函館山の自然の豊かさ、そして現在の豊かな自然は200年間かけて人の手で再生してきた結果であることに気が付いていきます。それは、同時に函館の未来を担う自分たちが、これから何をどう願うかで函館山が変化していくということも含んでいます。「どのように函館山の自然を守っていくべきか」というテーマで考え、「函館に住む5年生の意見を言葉にして大人に伝えよう」＝「提言文にまとめよう」という方向に進んでいきます。

加えて、総合の時間に、インターネットや文献、博物館の学芸員の方の講話、函館山で活動されているボランティアガイドさんと共に実際に登山、アンケート調査などを行って集めた情報から自分に必要な物を選び、充実した資料で提言文を書くということができました。

新学習指導要領においては、資質・能力の育成のためには、教科横断的な学習を充実することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められると示されています。学校全体として、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントについて考えることは、大がかりなことではありません。しかし、それらの一端は日々の学校生活で教師が捉えた小さな気付きである「点」が結びついたものであり、目の前の子供たちと離れたものではありません。もちろん、PDCAを重ねていくことでより充実したものになっていきます。ですから、一つの教科の一つの単元の計画を考えた際の「こうしたらもっと、効果的に学べるのではないか。」という気付きを大切にしていくことが、他教科や領域とのカリキュラムの工夫につながると考えました。